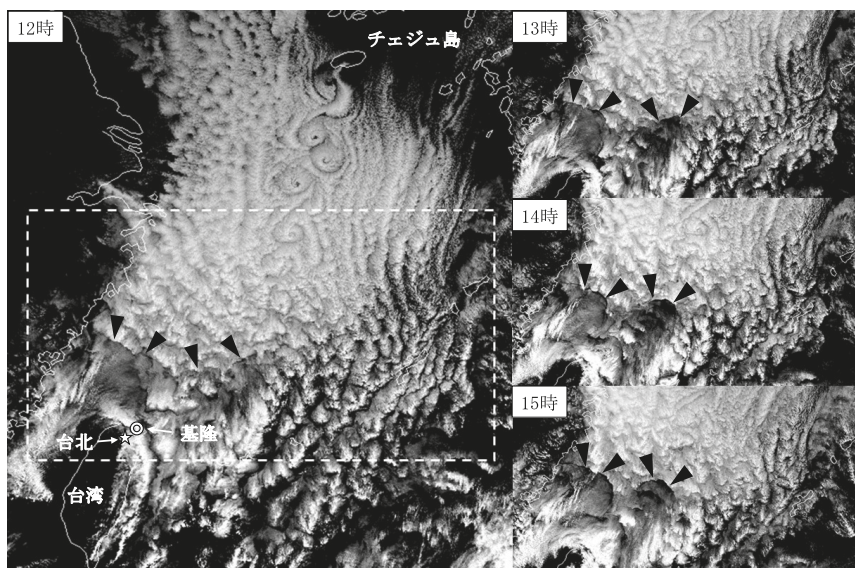




今月のひまわり画像—2023年11月

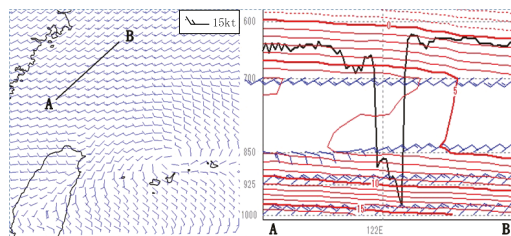
東シナ海南部で消散した寒気に伴う下層雲



第1図 東シナ海付近における2023年11月25日12～15時（日本時間）の1時間毎の可視画像。13～15時は12時の図における矩形（破線）の領域を示す。図中の▲は消散する下層雲の先端を指す。

2023年11月25日は冬型の気圧配置が次第に緩み、東シナ海付近は下層寒気に伴う雲に覆われていた。第1図は東シナ海付近における同日12～15時（日本時間）の1時間毎の可視画像である。チェジュ島の風下には明瞭なカルマン渦列が確認できる。これとは別に、同日12時頃から台湾の北側に周囲の雲域の移動方向（南向き）とは異なる方向（北向き）に進む、明瞭な雲域境界が確認できる（図中▲）。速度を衛星画像から概算すると13kt（1kt≒0.51m/s）前後である。この雲域境界は26日明け方にかけて東シナ海を北上し、次第に不明瞭となっていった。

25日09時は台湾北部の基隆（図中◎）で層積雲の観測があり、台北（図中☆）の同時刻の高層気象観測では900～780hPa付近に湿潤層、780～760hPa付近に顕著な沈降性逆転層が形成されていた。これらにより、東シナ海付近の雲域は逆転層に雲頂を抑えられた層積雲が主体であると考えられる。また、逆転層より上空の760～700hPa付近では温位がほぼ一定であり、中立層が存在していた。中立層上端の700hPa面付近では



第2図 気象庁局地数値予報モデル（LFM）による25日15時（同時刻初期値）の先島諸島付近における700hPa面の風分布図。右はA—Bに沿った鉛直断面図で、黒線は等価黒体温度から判断される雲頂高度、赤線は等温線（1℃毎、破線は0℃未満）、矢羽根は凡例を参照。

西南西10ktの風が観測されており、同日15時の先島諸島近傍には対応する高気圧性循環が解析されている（第2図）。中立層上端の速度は雲域境界の速度に近く、臨界高度も存在していた。したがって、雲域境界の移動は内部重力波の伝播に対応するものと推察される。

（気象庁大気海洋部予報課 村松勇治）